

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Beginning research for interior decoration of
"Onna-Norimono" (a vehicle for a Japanese feudal
lady)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008377

女乗物の内部装飾画に関する基礎的調査

日高真吾

抄録——江戸時代の交通文化を支えた乗用具である駕籠には、大名の婦女が使用した女性専用の駕籠である「女乗物」がある。女乗物は駕籠の中でも、外装、内装ともに、特に装飾性に優れたものである。本稿では内装の装飾画に注目し、女乗物の装飾性の発達事由について考察を行う。

Summary —— In Edo period the palanquin was main vehicle. It was called Kago in Japan, has several type of form. One type of them was exclusively for Japanese feudal lady use. It was called “Onna-Norimono”.

“Onna-Norimono” has excellent interior and exterior decoration.

In this paper I will observe interior decorative painting, and consider the reason and process of its development.

はじめに

駕籠は乗物と駕籠に大別される江戸時代を代表する乗用具である。乗物と駕籠の区別化は、精緻なものを乗物、そうでないものを駕籠とする曖昧な区別化がこれまでなされてきた。日高は駕籠の発生する事由や駕籠の形態に注目し、庶民階層が使用する駕籠の法仙寺駕籠も乗物の一種に数えられるとし、使用者のみの観点から乗物と駕籠を大別するべきではないと提言した（日高 2003年）。

さて、武家を中心とした階層が使用した乗物には男乗物と女乗物がある。男乗物と女乗物は主に外装から順位付けができ、男乗物の場合は、溜塗り惣網代男乗物、女乗物の場合は、黒漆塗り金蒔絵女乗物がそれぞれの最高位に順位づけられる。

男乗物の特徴は網代を用いて、機動性を重視している点が注目される。日光東照宮に伝えられる徳川家康使用の「網代御駕籠」（日光東照宮）や久能山東照宮に伝えられるやはり徳川家康使用の「網代駕籠」（久能山東照宮博物館 2003年）は、戦場での機動性を重視する形態を受け継ぐ乗物であるといえ、これは駕籠に分類される種々の駕籠にも共通して引き継がれているといえる。

一方、女乗物の特徴は、全面に蒔絵を施した黒漆塗りを施し、さらに装飾金具をふんだんに用いて装飾性を追及した点があげられる。これは、女乗物が婚礼調度の一つとして作ら

れ、実用的な側面よりも装飾面を優先する性質を持った乗物であるからと考えられる。外装の漆は男乗物、女乗物、さらに駕籠類にもそれぞれ用いられており、その塗りの技法の違いから各乗物、駕籠を順位付けることから、外装塗装材料として漆が権威づけられていたことは理解できる。

男乗物と女乗物の装飾性の大きな相違点は内部装飾にも見られる。男乗物は漆塗り、もしくはビロードや千代紙を貼るなど落ち着いた内装を施すのに対し、女乗物は花鳥画を中心とした紙本彩色画で彩る華やかな内装を用いる。ここに装飾性についての男乗物と女乗物の明確な差がみてとれる。『続視聴草』や『嬉遊笑覧』に記されるように罪人やけが人、荷物等を移送したアンダを実質的な駕籠の発生源とみる（注1）ならば、男乗物のように実用性を重視した発達を遂げる方が自然である。一方、女乗物のように装飾性を追及することは、駕籠の展開の中で異質な発展形態を示している。これは、女乗物が駕籠の中でも特に権威づけられた乗用具であったといえることができる。

以上のように、女乗物のみが駕籠の中で特異な展開をみせる装飾性の内、本稿では特に内部装飾画について注目し、女乗物の装飾性が特に発達する経緯とそこに用いられる装飾画の意義について考察し、女乗物の発生事由について所見を述べたい。

（注1）駕籠の発生について『続視聴草』と『嬉遊笑覧』には次のように記されている。

（続視聴草）

駕籠 俗称ナリ、本ハ篋輿ト云フモノニテ、病アルモノ、又ハ、罪科アリテ、械錠ヲ打テ歩行サセガタキ物を乗テ行ベキノ料ニ、竹木ヲ編テ輿ニ造リシ物ナリ

（嬉遊笑覧）

駕籠は監尻または秋草などにもいへる如く、もと和名抄刑罰の具に見えたる篋輿といふ物、後にはあんだと呼ぶ是なり

1. 輿・車に描かれる装飾画について

日本人が初めて使用した乗用具は車や輿であろうが、これらがどの時期に用いられるようになったのかは定かではない。しかし、少なくとも平安期には貴族階層による牛車を中心とした車文化が発達し、中世鎌倉期から戦国期には武家階層による輿を中心とした輿文化が発達、その後近世江戸期初頭より支配者階層から庶民階層にまで広く用いられる駕籠文化が展開することが、わが国の乗用具文化の大きな変遷である。ここであげた輿、車、駕籠はそれぞれに関連性をもちながら、日本の乗用具文化を形成してきた。しかし、江戸末期の開国に伴い、一気に押し寄せた西洋文明によって、日本の道路事情は一変し、人力車の発明、馬車や鉄道の導入など、乗用具文化は大きな転換期を迎えることとなる。したがって、わが国のゆるやかな歴史変遷の過程で展開する車、輿、駕籠とその後に登場する人力車、馬車、鉄道、自動車などは乗用具文化の中で大別できるものといえよう。

輿、車、駕籠の装飾性についてはまず、『輿車図考』や『守貞漫稿』から外見を大まかに知ることができる。しかし、これらの文献は外見のみを描いており、内部の装飾を知ることができない。

輿の内装は、重要文化財「宇佐神宮旧神輿障子絵」が実際に確認できる。これらは、宇佐新宮の徳治2年の放生会で使用された神輿3基にはめられていた徳治本と応永28年に再興した放生会のために新造した神輿3基にはめられた応永本からなる障子画である。(大分県立歴史博物館 2001年)。新造されたものに描かれるモチーフはいわゆる法華経絵と呼ばれる仏画であり、神事に使われる神輿の内装に宗教観を表現したものと考えられる。

文献上からは車や輿は、『延喜式』内匠寮に御輿、御腰輿、腰車、牛車として規定されているが、装飾画を担当する画師は、御輿7人、御腰輿半人、腰車3人と定められている。「宇佐神宮旧神輿障子絵」の事例から、内部に装飾画を描く場合は、障子画であることが推定できる。しかし、画師が規定される御輿、御腰輿、腰車(輦車)では、御輿に障子4枚、輦車に障子6枚としているが、御腰輿には障子の規定がみられない。牛車については障子とともに、画師の規定も設けられていない。このことから牛車には障子画は描かれてい

なかったと考えられる。

御輿、御腰輿、腰車に定められる障子や画師規定の有無の違いについて、『輿車図考』をもとに、使用目的の観点から考察してみる。

御輿とは輦輿の鳳輦、葱花輦を指している。輦輿とは肩の上で肩担するタイプであり、主に天皇の即位や大嘗会の御禊、晴れの儀式に使用される輿である。使用者は天皇、皇后、斎宮に限られ、この形態は神輿に受け継がれている。

御輿に対して御腰輿は腰輿^{たごし}を指している。御腰輿は、腰の位置で担ぐ、腰輿^{ようよ}タイプの輿である。御方違いの行幸や火事、地震などの非常時などに天皇にも使用される。また、上皇、大臣、高僧の使用があったことが紹介され、常用の輿としては最高位の輿であることがいえる。また、将来的に腰輿タイプの輿は、限定的ではあるが公家や武家へとその使用者層を広げていくようになる。

腰車とは輦車を指しており、これは宮廷内で使用する車であり、「輦車の宣旨」を受けたものでしか使用はできない。皇太子の晴れの儀式での使用や斎宮の使用が紹介されている。

牛車は平安時代を代表する公家の乗物であることはいうまでもないが、使用者の地位によって使用する牛車は違ってくる。

以上のように輿と車にはそれぞれ使用目的があったことを概観したが、障子の規定がある御輿は使用者が天皇、皇后、斎宮といった神格化された人物のみに限定され、その使用目的は神事等にあったことに気づく。ここから、御輿と神輿の密接な関連性がみえ、「宇佐神宮旧神輿障子絵」のような障子画の存在があったことが窺えるのである。

一方、御腰輿や輦車についてはその使用は日常的であり、神事との関連性が見受けられない。前述したように、輿や車の障子画について神事との関連性をもたせるならば、これらに障子画を描く必要性は感じないものの、御腰輿や腰車に規定された画師の役割については疑問が生じる。

御腰輿に規定される画師は半人であり、これは御輿7人、腰車3人からは極端に少ない。画師の役割について、家永は、正倉院文書の天平宝字2年にある東大寺大仏殿の彩色事業の記事から、わかりやすく画師の分業を図式化し、徹底的な分業制が見られることを指摘

している（家永三郎 1946年）。ここでは、画師の役割が、彩色、塗、木書、堺に分担され、木書や堺は図形を描き、彩色、塗が彩るという作業をおこなっている。この説の立場をとった場合、障子の規定を持たない御腰輿に規定される画師の役割は、絵を描くことではなく、部材の彩色や塗の役割を担ったのではないかと考えられる。

使用者が限定される乗用具が下の階層にまで使用者層を広げるためには、何らかの差別化を行い、順位がつけられて初めて可能になると考えられる。輿の場合、頭上の上に肩担する輦輿と輿の位置で担ぐ腰輿の肩担の方法による差別化とともに、障子画の有無による差別化が行われたと思われるのである。

腰車は御輿と同じように障子、画師の規定がみられる。腰車には神事にまつわるような側面は見出せず、そこに宗教的目的をもった仏画が描かれることはなかったかもしれないが、そこに障子がはめられ、障子画が描かれることは不自然ではあるまい。また、車の中では最高の権威を持ったものであり、前述したような乗用具の差別化の観点から、人が牽く腰車に対して牛で牽く牛車、障子画を備えた腰車に対して障子画のない牛車という差別化があったのではないだろうか考える。

2. 婚礼時に使用される女乗物の役割

女乗物の多くは婚礼時に整える婚礼調度の一つとして制作されることが多いと考えられるが、ここで整えられる乗用具は、輿と駕籠であり、これらの寸法規定は『婚礼道具図集』（正宗敦夫 1937年）にある。また婚礼の際、どのように輿や乗物が使用されたかについては「徳川種姫婚礼行列図」（東京国立博物館所蔵）にみることができる。「徳川種姫婚礼行列」では最初に「御召替御輿」として黒漆金蒔絵女乗物が登場する。この乗物には花嫁は乗らず、天児や犬張子が乗せられている。これらは、生まれた際に作られるいわばお守りのようなものであるが、本人の身代わりに乗せられる。その次に「長柄」と記される4台の輿が続き、花嫁を乗せた輿が登場する。花嫁を乗せた輿は、白塗りされ、銀泥で松竹鶴亀が描かれ、また、金鍍金した鶴、亀、松、竹の装飾金具が用いられている。花嫁を乗せた輿の後には、再び輿が6台続き、その後、「長柄切」と記述される白塗りの乗物が4台、

「面縁乗物」と記されているが、ビロード巻きと思われる女乗物が2挺、「黒縁金物乗物」と記されるが黒縁巻きと思われる女乗物が6台続いている。この「徳川種姫婚礼行列図」で黒漆金蒔絵女乗物はあくまで、花嫁がのる輿の召替という位置づけである。『女重宝記』（長友千代治 1993年）では、花嫁は輿に乗るようになっていることからあくまで婚礼調度の乗用具で権威づけられているのは輿であったことはわかる。なお、ここで示した事例は江戸中期から後期の婚礼の在り方であり、大名の婚礼ではもっとも華やかな時代と思われる江戸時代初期の婚礼形態を示す最後の事例と考えられる。幕府は、『武家諸法度』で寛永12年（1635年）と寛文3年（1663年）に乗用具の個数について長柄・釣輿30挺、長持は50棹を越えないように定め、宝永7年（1710年）にも嫁娶の儀式について各分限に従うべしと制限する法令（注2）がだされ、簡素化していく方針を打ち出している。

江戸後期の婚礼としては、天保7年（1836年）に尾張徳川家で行われる福君の婚礼（尾西市歴史民俗資料館 2002年）があるが、この婚礼の模様を描いた『福君江戸下向行列図』（徳川美術館所蔵）では花嫁は黒漆金蒔絵女乗物に乗輿している。ここでは、長柄と称される輿の存在はなく、完全に女乗物が輿の役割を担っていることがわかる。また、彦根城博物館所蔵の女乗物は、井伊直弼夫人昌子の婚礼調度として、「黒漆塗唐草八丁字紋散蒔絵駕籠」とその召換用の「紺地唐草文天鷲絨駕籠」、直弼の次女弥千代が高松藩世嗣（当時）松平頼聰への輿入れの際に使用した「黒漆塗松竹梅葵橘紋散蒔絵駕籠」とその召替用の「紺地唐草文天鷲絨貼駕籠」（注3）と伝えられている。これは江戸後期の婚礼で、「徳川種姫婚礼行列図」でみられる輿の役割を黒漆金蒔絵女乗物が果たし、召替用の乗用具として作られた黒漆金蒔絵女乗物の役割を天鷲絨巻き女乗物が果たしていることを実際に示している事例であるといえ、高橋も指摘する（高橋あけみ 2003年）大名の婚礼の簡素化が見てとれるのである。

以上のことから、江戸後期には黒漆金蒔絵女乗物は、上位にある輿の代わりを担うことになり、乗用具としての権威が上がっていることがわかる。これは男乗物には見られない現象である。男性使用の乗用具で最も権威づ

（注2）『武家諸法度』では婚礼道具について次のように定めている。

（寛永12年（1635年））

一嫁娶之規式近年小身の輩にいたるまで甚及華麗、向後諸道具以下分に過たる結構いたさず、可用儉約、譬大身たりといふとも、なかえつりこし三十挺、長持五十棹に過へからず、総而応分限可沙汰事

（寛文3年（1663年））

一嫁娶儀式不可及美麗、自今以後 彌其分限に應し可省略、假令大身たりといふとも、長柄つり輿三十挺、長持五十棹に過へからず、総して以此数量、分限に應し可沙汰事

（宝永7年（1710年））

一婚姻ハ……云々、嫁娶の儀式すへて当制を守りて、各分限に相合ふべき事

（注3）彦根城博物館所蔵「千松館保管器什台帳」に天鷲絨駕籠が黒漆金蒔絵の女乗物の召し替えとして伝えられている。

表 1 女乗物26挺の調査結果

	名称	所蔵・寄託機関	分類	用途
1	蒔絵梅鉢紋女儀御輿	石川県立美術館	黒漆	養子縁組
2	水草紋忍冬唐草模様蒔絵乗物	大野市歴史民俗資料館	黒漆	輿入れ
3	黒漆塗唐草八丁字紋散蒔絵駕籠	彦根城博物館	黒漆	輿入れ
4	紺地唐草文天鷲絨駕籠	同上	ビ	輿入れ
5	黒漆塗松竹梅葵橘紋散蒔絵駕籠	同上	黒漆	輿入れ
6	紺地唐草文天鷲絨貼駕籠	同上	ビ	輿入れ
7	黒漆塗ビロード貼橘紋女乗物	大通寺	ビ	養子縁組
8	女乗物	豊岡市立郷土資料館	黒漆	輿入れ
9	藩主用乗物	(財)土佐山内家宝物資料館	黒漆	不明
10	婦人用乗物	同上	ビ	不明
11	月丸扇紋女乗物	宇和島市立伊達博物館	黒漆	輿入れ
12	唐草杏葉紋蒔絵女乗物	佐賀県立博物館	黒漆	不明
13	伊東家女乗物駕籠	日南市教育委員会	黒漆	不明
14	浅野家女乗物駕籠	同上	黒漆	輿入れ
15	牡丹唐草丸十文蒔絵女乗物	尚古集成館	黒漆	不明
16	朱塗網代女乗物	同上	朱	不明
17	遑鷹羽紋菊唐草文蒔絵女乗物	熊本博物館	黒漆	輿入れ
18	九曜紋牡丹唐草文蒔絵女乗物	同上	黒漆	不明
19	葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物	(財)松浦史料博物館	黒漆	輿入れ
20	天鷲絨巻女乗物	同上	ビ	不明
21	松竹梅椿剣酢漿紋蒔絵女乗物	(財)江戸東京博物館	黒漆	不明
22	黒塗丸に三階菱紋散梅唐草文様蒔絵女乗物	同上	黒漆	不明
23	唐草揚羽蝶紋蒔絵女乗物	同上	黒漆	不明
24	梨地葵紋散松菱梅花唐草文様蒔絵女乗物	同上	黒漆	輿入れ
25	南部氏向鶴定紋散女乗物	盛岡市中央公民館	黒漆	輿入れ
26	梅笹文葵紋蒔絵女乗物	仙台市博物館	黒漆	輿入れ

分類表記

女乗物
黒漆金蒔絵・・・黒漆
ビロード巻き・・・ビ
網代朱塗り・・・朱

けられる乗用具はあくまで輿であり、これは『襲封家例令條』文化13年（1816年）で、徳川家斉の將軍宣下の際、津軽信順が輿を使用したことが問題となり、結局閉門の罰則が与えられたという記述（注4）からも相当に輿は権威づけられていたということがみてとれるのである。以上のことから、輿の代用ともなった女乗物は、駕籠の中でも権威づけられた乗用具であった1つの事例であるといえよう。

3. 女乗物に用いられた装飾画のモチーフ

平成14年度は、これまでの電話取材等による悉皆調査で、その所在が確認できていた女乗物26挺の調査（表1）を全国的に行った。そのうち、婚礼の際に製作されたことが確認できた女乗物は13挺であった。現存している女乗物に描かれる内部の装飾画のモチーフは主に花鳥画を中心とするものであった。共同

研究者である石井は一部の女乗物のモチーフの調査結果について報告した（石井里佳 2003年）が、ここでは、その後に追加調査できた女乗物、花鳥画以外のモチーフが描かれた女乗物も合わせて観察し、夢想窓、前面、前面に向かって左右の引き戸、左右の引き戸下部、左右側面、背面、天井の各部位（写真1～6）に描かれた装飾画のモチーフについて整理してみる。なお、ここではそれぞれの部位で中心となっているモチーフに焦点をあてることとする。

〈調査結果〉

- ① 蒔絵梅鉢紋女儀御輿（石川県立美術館）（写真1、2）
- 全面に金箔を押し、全体的に唐絵風に表す。夢想窓には装飾が描かれず、前面に舞楽を舞う人々（童舞か？）が描かれている。引き戸は琴棋書画の四芸を行う人々を中心に、それを見物する人物、周辺で遊ぶ人物を描いてい

（注4）徳川家斉の將軍宣下の際、津軽信順が輿を使用した件について、文化13年（1816年）4月の『襲封家例令條』に「御三家方庶流衣冠束帯之節輦為相用度儀ニ付取調申上候書付」に経緯が詳しく記されている。

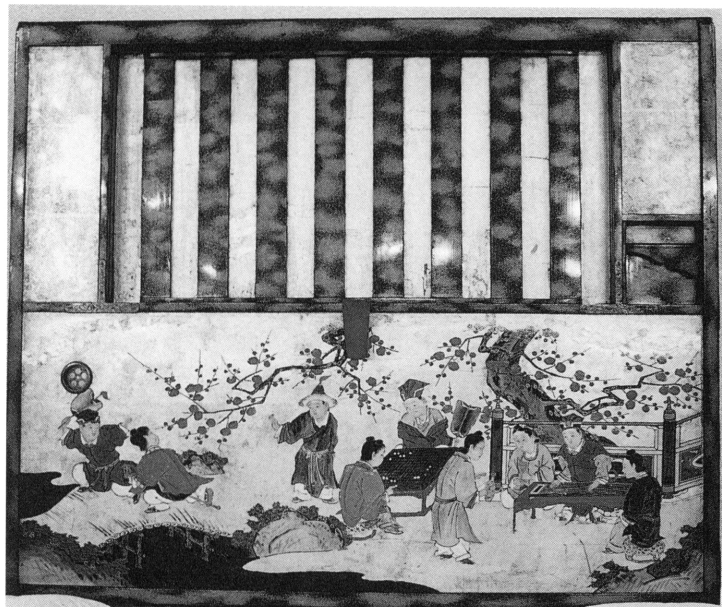


写真1 右扉の琴棋：蒔絵梅鉢紋女儀御輿（石川県立美術館）

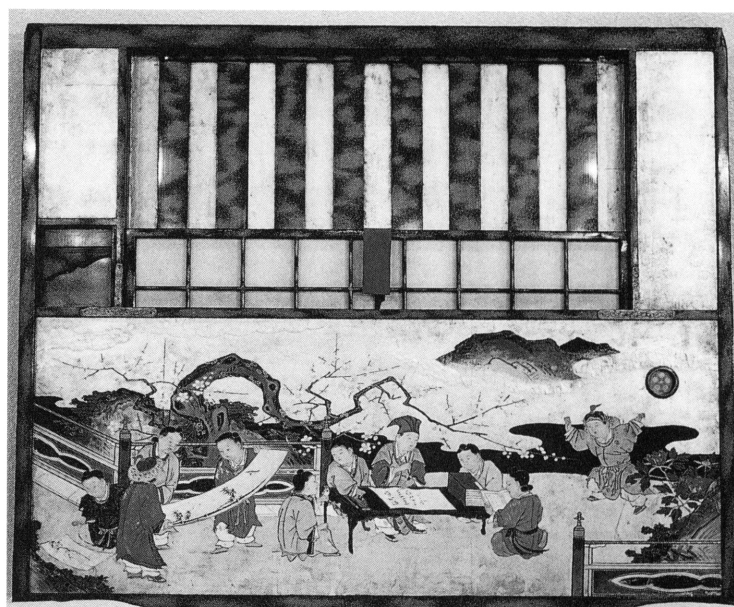


写真2 左扉の書画：蒔絵梅鉢紋女儀御輿（石川県立美術館）

る。左の引き戸には書と画、人物、梅を描き、右の引き戸は琴と棋、人物、梅を描いている。左右の引き戸下部は、土筆、オオバコ、わらび、たんぽぽ、げんげ（れんげ）、すみれを描いている。左右の側面と背面は一つに構成されており、松を中心に飛来する2羽の鶴と松の下で遊ぶ人物を描いている。また、たらいの中や川の中にあわせて5匹の亀が描かれている。天井画は玩具を描いている。

② 水車紋忍冬唐草模様蒔絵乗物（柳廻神社（大野市歴史民俗資料館））

四方は金箔で雲を表し、空間に金砂子を置く。全体を花鳥画で表す。夢想窓は紅白の梅を描き、前面の下部は欠損しているが、上部には梅と笹、梅に止まる^{うぐいす}鶯と飛来する鶯を描いたものが残存している。左の引き戸は右下が欠損しているが、菊、萩、イネ科の植物が描かれている。右の引き戸はほとんどが欠損しているが、イネ科の植物がわずかにみられる。左右の引き戸下部はいずれも欠損している。左側面は菊が描かれているが下部は欠損している。右側面は松の新芽とツツジが描かれている。背面は松、竹、コウシンバラ、飛来する2羽の鶴、背後に海を描いている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

③ 黒漆塗唐草八丁字紋散蒔絵駕籠（彦根城博物館）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は梅を描き、前面は梅とコウシンバラが描かれている。また、飛来する鶯と梅に止まる鶯が2羽描かれている。左の引き戸は菊

と萩、右の引き戸は藤と撫子が描かれている。左右の引き戸下部には松の新芽と、つがいの^{おしどり}鴛鴦が描かれている。左側面は菊と女郎花、右側面はツツジと松の新芽が描かれている。背面は松、竹、コウシンバラ、飛来する2羽の鶴と巣の中の雛鶴、2匹の亀が描かれている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

④ 紺地唐草文天鷲絨駕籠（彦根城博物館）

四方は金箔で雲を表し、空間に金砂子を置く。全体を花鳥画で表す。夢想窓には撫子を描き、前面には梅と竹、梅に止まる2羽の鶯を描く。左扉には杜若と撫子、右扉には菊を描く。左右の引き戸の下部は松と楓、つがいの鴛鴦が描かれている。左側面は菊、右側面はコウシンバラと松の新芽が描かれている。背面は松、竹、コウシンバラ、飛来する鶴、亀が描かれている。天井画は金砂子置き、丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑤ 黒漆塗松竹梅葵橘紋散蒔絵駕籠（彦根城博物館）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は梅を描き、前面は杜若と撫子、水葵、飛来する2羽の尾長鳥、2匹の亀が描かれている。左の引き戸は梅、コウシンバラと飛来する2羽の鶯、つがいの鴛鴦、右の引き戸は菊、楓、ヤブコウジ、飛来する^{しじゅうから}四十雀が描かれている。左引き戸下部はヤブコウジ、右引き戸下部は笹を描いている。左側面は梅、右側面は楓と水仙、飛来する^{るりびたき}瑠璃鶴を描いている。背面は松、笹、ヤブコウジ、飛来する鶴と巣を守る鶴、巣の中の雛鶴が描かれている。

天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑥ 紺地唐草文天鷲絨貼駕籠（彦根城博物館）

四方は金箔で雲を表し、空間に金砂子を置く。全体を花鳥画で表す。夢想窓は梅を描き、前面は梅に竹、飛来する鶯と梅に止まる鶯を描く。下部は欠損している。左の引き戸は菊、右の引き戸は鉄線と撫子が描かれている。引き戸下部は欠損している。左側面は菊、右側面は楓、松の新芽が描かれている。背面は松、コウシンバラ、飛来する鶴と巣を守る鶴、巣の中の雛鶴、2匹の亀が描かれている。天井画は金砂子置き、丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑦ 黒漆塗ビロード貼橘紋女乗物（大通寺）

空間に金砂子を張り、全体を花鳥画で表す。夢想窓は撫子、桔梗を描き、前面は松、ツツジ、2羽の鶴を描いている。左の引き戸は杜若、つがいの鴛鴦、飛来する2羽の山翡翠、右の引き戸は梅、笹、梅に止まる4羽の雀を描いている。左右の引き戸下部は敷物が置いてあり、今回の調査では観察できなかったが、一部、松の新芽が確認できた。左右の側面は牡丹を描いている。背面は松と笹が描かれており、下方は敷物に隠れて確認できなかった。

⑧ 女乗物（豊岡市立郷土資料館）

全体を千代紙で貼っているが、後補のものと考えられる。夢想窓の一部の連子に撫子、天井画に草花の描かれていた痕跡が見られ、本来は他の女乗物同様、花鳥画が描かれていたと推定できる。

⑨ 藩主用乗物（（財）土佐山内家宝物資料館）
（注5）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は撫子を描き、前面は菊、飛来する5羽の小鳥（雀3羽・鶯・鶯）を描く。左の引き戸は梅、松の新芽、笹、飛来する3羽の小鳥（雀2羽・鶯）、梅に止まる2羽の小鳥（雀・鶯）、右の引き戸は梅、松の新芽、竹、飛来する2羽の雀と梅に止まる雀、鶯、鶯を描いている。左の引き戸下部は両端が欠損しており、松と楓が残存している。右の引き戸下部は松、楓、つがいの鴛鴦が描かれている。左右ともほぼ同じ構図であり、おそらく、引き戸下部も右と同様の図柄が描かれていたと推定される。左側面は椿、右側面は楓を描いている。背面は松、竹、ヤブコウジ、椿、飛来する2羽の鶴と地に立つ鶴、2匹の亀が描か

れている。天井画は草花が描かれている。

⑩ 婦人用乗物（（財）土佐山内家宝物資料館）

全体を花鳥画で表す。金箔は用いられない。夢想窓は梅を描き、前面は梅と飛来する2羽の鶯と梅に止まる2羽の鶯を描いている。左の引き戸は牡丹を描き、右の引き戸は金銀砂子を張っている。右の引き戸に張られる金銀砂子は、この他に天井画にもみられるがこれらは後補のものと考えられる。引き戸下部は松と水流を歩く2羽の鶴が描かれる。左側面は楓、右側面は桜を描いている。背面は松、笹、飛来する2羽の鶴、巣の中の雛鶴、2匹の亀を描いている。天井画は草花を描いている。

⑪ 月丸扇紋女乗物（（財）伊達文化保存会（宇和島市立伊達博物館））

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は松の新芽を描き、前面は梅、松の新芽、椿と飛来する鶯と梅に止まる鶯を描いている。左の引き戸は菊、女郎花、藤袴、笹、右の引き戸は牡丹、笹を描いている。左右の引き戸下部は松の新芽、つがいの鴛鴦を描いている。左側面は菊、右側面は牡丹を描いている。背面は松、コウシンバラ、笹、飛来する2羽の鶴と巣の中の雛鶴、2匹の亀を描いている。天井画は家紋を描いている。

⑫ 唐草杏葉紋蒔絵女乗物（佐賀県立博物館）

空間に金砂子を張り、全体を花鳥画で表していたと思われる。夢想窓は撫子を描き、前面、左右の引き戸、引き戸下部は欠落している。左側面は一部残存しているのが見られるが、右側面は欠落している。背面は下部が欠落しているが、松、梅、竹、笹、飛来する鶴と巣を守る鶴、巣の中の雛鶴を描いている。天井画は丸くデザイン化された草花を描いている。

⑬ 伊東家女乗物駕籠（日南市教育委員会）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表していたと思われる。夢想窓は撫子を描き、前面、左右の引き戸は欠落している。左右の引き戸下部は松の新芽とつがいの鴛鴦が描かれている。左側面は菊、右側面は牡丹を描いている。背面は松、竹、コウシンバラ、飛来する2匹の鶴、2匹の亀を描いている。天井画は草花が描かれている。

⑭ 浅野家女乗物駕籠（日南市教育委員会）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表していたと思われる。夢想窓は撫子を描き、前

（注5）藩主用乗物は現在、男乗物として伝えられているが、内部装飾画の存在や外装の黒漆金蒔絵の乗物という点から、女乗物と判断することが望ましい。

面は梅、椿、笹と飛来する鶯、梅に止まる鶯を描く。左の引き戸は菊、藤袴、萩、飛来する小雀、右の引き戸は牡丹、野鶺鴒のびたきを描いている。左右の引き戸下部は梅とつがいの鴛鴦が描かれている。左側面は菊、藤袴、飛来する鶯、右側面は牡丹、飛来する四十雀を画いている。背面は大部分が欠落しているが松、巢を守る鶴、巢の中の雛鶴がみられる。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑮ 牡丹唐草丸十文蒔絵女乗物（尚古集成館）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は梅、松の新芽、梅を交互に描き、前面は梅と笹、飛来する鶯、つがいの鴛鴦が描かれている。左の引き戸はコウシンバラと笹、右の引き戸はツツジが描かれている。左の引き戸下部は欠落、右の引き戸下部のみ残存している。左側面はコウシンバラと竹、右側面はツツジと松を描いている。背面は松、椿、ヤブコウジ、飛来する鶴と松に止まる鶴、2匹の亀が描かれている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑯ 朱塗網代女乗物（尚古集成館）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は梅を描き、前面は梅、笹、飛来する鶯が描かれている。左の引き戸は菊、右の引き戸は杜若、撫子が描かれている。左の引き戸下部は松の新芽、ヤブコウジが描かれ、右の引き戸下部は松の新芽がわずかに残存している。引き戸下部は左右とも同じ構図が描かれていたと思われる。左側面は楓と水仙、右側面は鉄線と撫子、網代御簾を描いている。背面は松、コウシンバラ、ヤブコウジ、飛来する2羽の鶴、2匹の亀が描かれている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑰ 達磨羽紋菊唐草文蒔絵女乗物（（財）永青文庫（熊本博物館））

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は梅を描き、前面は梅、椿、梅に止まる鶯が描かれている。左の引き戸は菊、萩、飛来する四十雀、右の引き戸は牡丹、飛来する四十雀が描かれている。左右の引き戸下部は松の新芽とつがいの鴛鴦を描いている。左側面は菊、飛来する四十雀、右側面は牡丹、飛来する鶯を描いている。背面は松、コウシンバラ、笹、飛来する2羽の鶴と巢の中の雛鶴、2匹の亀が描かれている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑱ 九曜紋牡丹唐草文蒔絵女乗物（（財）永青文庫（熊本博物館））

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は梅を描き、前面は梅、笹、飛来する鶯と梅に止まる鶯が描かれている。左の引き戸は菊、右の引き戸は杜若、コウシンバラが描かれている。左右の引き戸下部は欠落している。左側面は菊、右側面は藤棚、撫子を描いている。背面は欠落している。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑲ 葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物（（財）松浦史料博物館）（写真3～6）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は松の新芽を描き、前面は梅、竹、松の新芽、飛来する2羽の鶯が描かれている。左の引き戸は牡丹、ツツジ、松の新芽、飛来する2羽の尾長鳥、右の引き戸は菊、萩、水葵、アザサ、笹、つがいの鴛鴦が描かれている。左の引き戸下部は撫子、椿、芙蓉、女郎花、桔梗、水葵、つがいの鴨、右の引き戸下部は菊、萩、桔梗、水葵、杜若、つがいの鴨を描いている。左側面は牡丹、飛来する2羽の四十雀、右側面は菊、萩、飛来する2羽の雀を描いている。背面は松、竹、コウシンバラ、飛来する2羽の鶴、巢の中の雛鶴、2匹の亀が描かれている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

⑳ 天鷲絨巻女乗物（（財）松浦史料博物館）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は撫子を描き、前面は梅、椿、梅に止まる2羽の鶯が描かれている。左の引き戸は菊、女郎花、飛来する鶯、右の引き戸は牡丹、杜若、飛来する鶴と水辺に立つ鶴が描かれている。左右の引き戸下部は松の新芽と2羽の四十雀を描いている。左側面は菊、右側面はコウシンバラ、竹を描いている。背面は松、竹、コウシンバラ、高砂、飛来する2羽の鶴、3羽のコウノトリが描かれている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

㉑ 松竹梅椿剣酢漿紋蒔絵女乗物（（財）江戸東京博物館）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は松の新芽と梅交互を描き、前面は梅、芍薬、梅に止まる2羽の鶯を描いている。左の引き戸は菊、飛来する瑠璃鶴、右の引き戸は牡丹と飛来する四十雀を描いている。左右の引き戸下部はつがいの鴛鴦とともに3羽の水鳥、が描かれている。左側面は梅と椿、右



写真3 前面：葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物（（財）松浦史料博物館）



写真4 右側面部：葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物（（財）松浦史料博物館）



写真5 左側面部：葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物（（財）松浦史料博物館）



写真6 背面：葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物（（財）松浦史料博物館）

側面は松の新芽と芍薬が描かれている。背面は松、梅、竹、飛来する鶴と巢を守る鶴、巢の中の雛鶴、亀が描かれている。天井画は丸くデザイン化された草花を描いている。

㊥ 黒塗丸に三階菱紋散梅唐草文様蒔絵女乗物（（財）江戸東京博物館）

全面に金箔が押され、源氏物語が描かれる。胡蝶の場面を四方に描いている。主な構図は、前面に源氏と紫の上、玉蔓を描き、左扉は胡蝶を舞う童子、右扉は漕ぎ出された竜頭鷄首、背面は玉蔓を想う男性貴族を描いている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

㊦ 唐草揚羽蝶紋蒔絵女乗物（（財）江戸東京博物館）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は梅を描き、前面は梅、竹、飛来する鶯を描いている。左の引き戸は松の新芽、コウシンバラ、右の引き戸は菊を描いている。

左右の引き戸下部はアサザ、ヤブコウジ、オモダカを描いている。左側面は楓、水仙、右側面は桜、鉄線を描いている。背面は松、梅、飛来する鶴、松に止まる鶴が描かれている。亀は確認できない。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

㊧ 梨地葵紋散松菱梅花唐草文様蒔絵女乗物（（財）江戸東京博物館）

全面に金箔が押され、源氏物語が描かれる。紅葉賀の場面を四方に描いている。主な構図は、前面に源氏と頭の中将の舞を見る帝と藤壺の宮の座す間、左の引き戸に青海波を舞う源氏と頭の中将、右の引き戸や側面、背面は源氏と頭の中将の舞を見物する女御や更衣が描かれている。天井画はなく、織物が張り込まれている。

㊨ 南部氏向鶴定紋散女乗物（盛岡市中央公民館）

全面に金箔が押され、全体を花鳥画で表す。夢想窓は撫子を描き、前面は梅、椿、梅に止

表 2

	名称	前面	左引戸	右引戸	左側面	右側面	背面
1	蒔絵梅鉢紋女儀御輿	舞楽を舞う人々	琴棋書画(琴・棋)	琴棋書画(書・画)	人物	人物・亀	人物・亀・鶴・松・竹・椿
2	水車紋忍冬唐草模様蒔絵乗物	梅	菊・萩	ほとんどが欠	菊	ツツジ	松・竹・コウシンバラ・鶴・亀
3	黒漆塗唐草八丁字紋散蒔絵駕籠	梅・椿	菊・萩	藤・撫子	菊・女郎花	ツツジ	松・竹・コウシンバラ・鶴・雛鶴・亀
4	紺地唐草文天鷲絨駕籠	梅	杜若・撫子	菊	菊	コウシンバラ	松・竹・コウシンバラ・鶴・亀
5	黒漆塗松竹梅葵橘紋散蒔絵駕籠	杜若・撫子	梅・コウシンバラ	菊・楓	梅	楓・水仙	松・竹・鶴・雛鶴・亀
6	紺地唐草文天鷲絨貼駕籠	梅	菊	鉄線・撫子	菊	楓	松・コウシンバラ・鶴・雛鶴・亀
7	黒漆塗ピロード貼橘紋女乗物	松・ツツジ	杜若	梅	牡丹	牡丹	松・笹
8	女乗物	千代紙	千代紙	千代紙	千代紙	千代紙	千代紙
9	藩主用乗物	菊	梅	梅	椿	楓	松・竹・椿・鶴・亀
10	婦人用御乗物	梅	牡丹	欠	楓	桜	松・笹・鶴・雛鶴・亀
11	月丸扇紋女乗物	梅・松新芽・椿	菊・女郎花・藤袴	牡丹	菊	牡丹	松・竹・コウシンバラ・鶴・雛鶴・亀
12	唐草杏葉紋蒔絵女乗物	欠(夢想窓の脇に菊)	欠(夢想窓の脇に菊)	欠(夢想窓の脇に菊)	欠	欠	松・梅・竹・鶴・雛鶴
13	伊東家女乗物駕籠	欠	欠	欠	菊	牡丹	松・竹・コウシンバラ・鶴・亀
14	浅野家女乗物駕籠	梅・椿	菊・藤袴・萩	牡丹	菊・藤袴	牡丹	松・竹・鶴・雛鶴
15	牡丹唐草丸十文蒔絵女乗物	梅	コウシンバラ	ツツジ	コウシンバラ	ツツジ	松・椿・鶴・亀
16	朱塗網代女乗物	梅	菊	杜若・撫子	楓・水仙	鉄線・撫子	松・コウシンバラ・鶴・亀
17	遼鷹羽紋菊唐草文蒔絵女乗物	梅・椿	菊・萩	牡丹	菊	牡丹	松・コウシンバラ・鶴・雛鶴・亀
18	九曜紋牡丹唐草文蒔絵女乗物	梅	菊	杜若・コウシンバラ	菊	藤・撫子	欠
19	葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物	梅	牡丹・ツツジ	菊・萩・水葵・アサザ	牡丹	菊・萩	松・竹・コウシンバラ・鶴・雛鶴・亀
20	天鷲絨巻女乗物	梅・椿	菊・女郎花	牡丹・杜若	菊	コウシンバラ	松・竹・コウシンバラ・高砂・鶴・コウノトリ
21	松竹梅椿剣酢漿紋蒔絵女乗物	梅	菊・露草	牡丹	梅・椿	芍薬	松・梅・竹・鶴・雛鶴・亀
22	黒塗丸に三階菱紋散梅唐草文様蒔絵女乗物	源氏物語・胡蝶	源氏物語・胡蝶	源氏物語・胡蝶	源氏物語・胡蝶	源氏物語・胡蝶	源氏物語・胡蝶
23	唐草揚羽蝶紋蒔絵女乗物	梅	コウシンバラ	菊・男郎花	楓・水仙	桜・鉄線	松・梅・鶴
24	梨地葵紋散松菱梅花唐草文様蒔絵女乗物	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀
25	南部氏向鶴定紋散女乗物	梅・椿	菊	牡丹	菊・桔梗・女郎花	コウシンバラ	松・竹・コウシンバラ・鶴・雛鶴・亀
26	梅笹文葵紋蒔絵女乗物	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀	源氏物語・紅葉賀

まる鶯を描いている。左の引き戸は菊、飛来する鶯、右の引き戸は牡丹、飛来する瑠璃鶴、菊を描いている。左右の引き戸下部は梅、つがいの鴛鴦を描いている。左側面は菊、桔梗、飛来する四十雀、右側面は松の新芽、芍薬、飛来する鶯を描く。背面は松、コウシンバラ、飛来する鶴、巣を守る鶴、巣の中の雛鶴、亀が描かれている。天井画は丸くデザイン化された草花が描かれている。

②⑥ 梅笹文葵紋蒔絵女乗物（仙台市博物館）

全面に金箔が押され、源氏物語が描かれる。紅葉賀の場面を四方に描いている（高橋あけみ 2000年）。主な構図は、前面に源氏と頭の中将の舞を見る帝と藤壺の宮、右の引き戸に青海波を舞う源氏と頭の中将、側面や背面は山々と松、桜、柳などの背景を描き、左の引き戸は胡蝶を舞う童子が描かれている。天井画は花鳥が描かれている。

4. 考察

装飾画は主に夢想窓、前面、左右引き戸、左右側面、背面に大きく描かれていた。この結果、21挺に花を中心とした花鳥画が描かれており、その大部分を占めている。主に用いられた装飾画のモチーフについて、前面、左右引き戸、左右側面、背面の観察結果を表2に示す。各部位に描かれる花々は、基本的に吉祥を表す「松竹梅」を基本的なモチーフとし、季節を表現する花々を組み合わせるモチーフが大きな傾向として見て取れる。各部位の傾向としては、前面は梅を中心としたモチーフ、左面に当たる左引き戸、左側面には秋をあらわす植物、右面の右引き戸、右側面には夏をあらわす植物、また背面には松を中心縁起物の鶴亀を配置するモチーフを描く傾向がみられた。

例外的なモチーフとして、舞楽と琴棋書画、水遊びをモチーフとした「蒔絵梅鉢紋女儀御

輿」をあげることができる。この女乗物は玩具をモチーフとした天井画を描いており、明らかに他の女乗物の装飾画とは傾向が異なっている。「蒔絵梅鉢紋女儀御輿」は、前田慶寧の第6女「貞姫」が専光寺に養女として入寺した際、用いられたものと伝えられている。貞姫は生後3ヶ月で専光寺に入寺していることから、使用者の年齢に応じて装飾画のモチーフが選択されたと考えられる。

花鳥画や上記の「蒔絵梅鉢紋女儀御輿」のモチーフ以外に源氏物語の場面をモチーフとした「梨地葵紋散松菱梅花唐草文様蒔絵女乗物」、「黒塗丸に三階菱紋散梅唐草文様蒔絵女乗物」、「梅笹文葵紋蒔絵女乗物」が観察された。「梨地葵紋散松菱梅花唐草文様蒔絵女乗物」、「黒塗丸に三階菱紋散梅唐草文様蒔絵女乗物」の使用者は徳川御三家や徳川将軍家に関係する人物の使用が推定され、「梅笹文葵紋蒔絵女乗物」はその使用者が尾張徳川家出自の錯姫である。いずれも徳川家宗家、御三家に關係する人物に限られる女乗物に用いられているモチーフであり、梨地の女乗物と同様、例外視される装飾画のモチーフであったことが伺える。

おわりに

本稿では輿の描かれた障子画と駕籠で唯一、装飾画が用いられる女乗物の装飾画との関連性について焦点を当て、乗用具としての女乗物の位置づけを明らかにしようと試みた。その結果、江戸初期の婚礼時の乗用具で輿の召し替えとして付属的な役割であった女乗物が、江戸後期の婚礼儀式では、輿の担っていた役割を引き継ぎ、乗用具としての地位を向上させていることをある程度明らかにすることができたと考えている。このことから、女乗物は日常の乗用具として実用性を要求されて発生しているのではなく、晴れの儀式で使用する儀礼用の乗用具としての起源をもち、より輿の系統を受け継いだ乗用具であるといえ、その使用目的や発生事由はほかの駕籠とは区別して考える必要があると考える。ただし、女乗物の主たる使用者である大名夫人の生活習俗は文献も少なく、その全貌はなかなか明らかにできないことから、日常の場面で使用することを目的とした女乗物の使用方法は今後、さらに注意深く考察していく必要がある。

女乗物の装飾画のモチーフである花を中心とする花鳥画は、婚礼という儀式において使用者の幸福を願うため、吉祥、長寿を表現するモチーフが選ばれたといえよう。また部位ごとに春夏秋冬の季節ごとの花々が描かれる傾向は、四季を意識して発生した花鳥画の伝統を踏襲して描かれている。

例外的に源氏物語をモチーフとした装飾画が、将軍家、徳川御三家にゆかりの女性を使用した女乗物3挺に観察された。これらの家格の女乗物の外装の漆芸技法は梨地仕上げの女乗物が作られることがあることが確認されている（室瀬和美 2001年）。本調査では、源氏物語を描いた女乗物で「黒塗丸に三階菱紋散梅唐草文様蒔絵女乗物」、「梅笹文葵紋蒔絵女乗物」は黒漆金蒔絵の女乗物にも観察された。ここからも使用者の出自や嫁ぎ先によってもさらに差別化がなされていたことを感じさせる。したがって、女乗物のなかで外装に梨地仕上げが施される女乗物は相当の権威を表していたといえよう。本調査の成果のひとつであるといえよう。

以上、女乗物の装飾画について概観したわけだが、これまでほとんど注目されてこなかった女乗物の装飾画の傾向と使用者の家格による差別化が見て取れたのは本調査の成果の一つであるといえる。今後、外装の漆芸技法との関連性についても合わせて考察し、女乗物の全容に少しでも迫れればと考えている。（ひだか しんご）

謝辞 本調査で行った装飾画のモチーフの分類作業について、和高智美氏、(財)元興寺文化財研究所の石井里佳氏に協力をいただいた。また、今回調査を行うにあたっては以下に示す機関に協力をいただいた。ここに記して感謝したい。(50音順敬称略)

石川県立美術館、宇和島市立伊達博物館、(財)永青文庫、(財)江戸東京博物館、大野市歴史民俗資料館、熊本博物館、佐賀県立博物館、尚古集成館、仙台市博物館、大通寺、(財)伊達文化保存会、(財)土佐山内家宝物資料館、豊岡市立郷土資料館、日南市教育委員会、彦根城博物館、(財)松浦史料博物館、宮崎県総合博物館、盛岡市中央公民館、柳廻神社

なお、本研究の成果の一部は科学研究費補助金特定領域研究『江戸のモノづくり』の公募研究『江戸期における「乗りもの」の研究—大名駕籠を中

心とした江戸のモノづくり―』（課題番号
14023247）によるものである。

参考文献

- 日高真吾「乗物と駕籠に関する一考察―守貞漫稿を中心―」『民具研究第127号』東京：日本民具学会、pp. 19-35、2003年
- 久能山東照宮博物館『久能山東照宮博物館100選』2003年
- 大分県立歴史博物館『八幡信仰とその遺産』：大分、大分県立歴史博物館、2001年
- 家永三郎『上代倭絵の研究』：東京、高桐書院、pp. 365-414、1946年
- 正宗敦夫「婚礼道具図集」『日本古典全集』：東京、日本古典全集刊行会、1937年
- 長友千代治『女重宝記』：東京、社会思想社、1993年
- 高橋あけみ「竹菱梅葵紋散蒔絵女乗物について」『仙台市博物館調査報告第23号』：宮城、仙台市博物館、pp. 15-28、2003年
- 石井里佳「女乗物の内部装飾画に関する一考察」『元興寺文化財研究No.83』：奈良、元興寺文化財研究所、pp. 11-17、2003年
- 室瀬和美「江戸東京博物館蔵梨子地葵紋散松菱梅花唐草文様蒔絵女乗物の保存修復について」『東京都江戸東京博物館研究報告第6号』東京：江戸東京博物館、pp. 45-83、2001年